

クッチャロ湖のラムサール条約登録指定

山内 昇

(1999年発行 クッチャロ湖ラムサール10周年記念誌より抜粋)

クッチャロ湖のラムサール条約登録指定

1963年以來、浜頓別町で国有林の職場を得ながら、クッチャロ湖の自然を見続けて来た。特に白鳥については、一入なものがあった。私は、樺太遠淵村遠淵湖(現サハリン州ムラヴィエヴォ村ブッセ湖)生まれ。子供の頃から、白鳥やカモなどは身近に慣れ親しんだ動物であった。

クッチャロ湖の自然、特に白鳥との再会が、切っ掛けとなりライフワークにし、この町に骨を埋める決意をした。今年で、68歳と言う人生を振り返ってみると、60年間も野鳥との関わり合いを持ってきて、その内35年間もクッチャロ湖の白鳥とのつき合いをさせて頂いた。健康であればこそその感謝の日々である。

一個人では保護など何もできない者が、皆んな周りの(町内外の)素晴らしい人達に恵まれ、影に陽に励まされ、職場の中でも故人になられた方々も含め、日夜問わず応援して頂いた。

町長宅には何度も伺い、湖の保護区についてスライドを使いながら、力説したこともあった。行政の長として即答をさけながらも全て前向きに解決して頂いた。

1967年、保護運動しながら、白鳥の湖がNHKテレビで全国放送されるようになってから、遠来の観光客も白鳥を観察に多く訪れ、湖を利用される人も増えた。日本最北の白鳥の湖を紹介されたテレビの効果は大きかった。その頃、テレビ放送するというのは、テレビ局も大変な事業であった。フィルム取材のため、カメラを動かすのに湖畔で自家発電をしながら器具の作動をする。発電音と大型機材に白鳥は怯え、大型の望遠レンズを使用した取材では、取材スタッフも苦勞の連続で只々、感謝している。

その頃、日本白鳥の会1973年(昭和48年)設立。二代目会長、松井繁先生が、この湖へ観察においでになっておられた。松井繁先生は「全国各地の白鳥愛護者を一同に会し、保護思想を高揚させようではないか」と各地で白鳥に携わっている人達に呼びかけた人である。私にはこの出会いから、松井先生には公私に亘り、ご高配を賜っ

ている。設立された日本白鳥の会が縁で、白地の関係者とも大きく交流ができ、クッチャロ湖も全国の仲間入りができた。

1973年（昭和48年）環境庁浜頓別一級鳥類観測ステーションも設立され、山階鳥類研究所の吉井先生、タンチョウ研究者の正富先生のご指導を得ながら、私もスタッフの一人として、現在まで野鳥の調査を行っている。このステーション発足以来、著しく野鳥の研究成果をみている。一時的ではあったが、北海道大学獣医学部により水鳥から、インフルエンザウィルスを採集して研究もされた。

1980年（昭和55年）、白鳥と鶴の国際シンポジウムを松井先生が先頭になって、札幌市で開催された。折しも、私も参加させて頂いた。このシンポジウムが契機となりラムサール条約という、この言葉が理解できるようになった。

この年、ラムサール条約湿地指定に第1号として、浜頓別町が名乗りをあげた。故・坂下町長も札幌のホテルでは、それはよいことと是非、参加しようと前向きであったが、地元に戻ってからは農業開発という難題に直面し町民の理解を得られなかった。

日本のラムサール条約第1号指定は、釧路湿原が決定し、後に国立公園となった。それから10年目の1989年（平成元年）、全国では、3番目としてクッチャロ湖が長年の願望適いラムサール条約に指定される。国際的に重要な湿地として、地球規模で保護される条約に認められた訳で感無量であった。色々とマスコミ等に取り上げて頂き、国を上げて協力して頂いている。

その頃、立松和平先生と湖畔でお逢いした。最初の頃は、私を奇人の様に映ったかも知れない。妻に先立たれ「黄泉」に独り身ゆえ、昼飯はもっぱら湖畔で白鳥と共にパンを食いながら観察を兼ねての昼休みで再来した。立松先生は、作家故に私を国語の教科書、中学1年の本州版に掲載している。この教科書の取り持つ縁で、本州各地の生徒達から励ましの便りや文集を多く頂いている。

1992年1月6日、寒に入り本当に寒い日であった。司馬遼太郎先生来町。私は日課で湖の氷割し白鳥に給餌している折に湖畔でお逢いした。先生は毛糸の手袋、私はゴム手袋を履いたまま手袋どうしの握手をした。その後、舎の中で改めて握手を頂いた。30分余、色々なお話をした。私は樺太生まれなので、寒いのは慣れているから、白鳥の保護について種々聞かれた。又、樺太の話をゆっくり聴きたいねと言ってお別れした。

この時の対話の様子を「オホーツク街道をゆく」の一説となって発表され、別れ際に「この寒いのに白鳥の保護をといても健康でなければ出来ないこと、十分気を付けて下さい」とご注意も頂いた。いつかまた、お逢いできると思っていたが、当地においでになった翌年、急逝された。あの握手の温もりが忘れられない。

1995年、湖畔に環境庁が水鳥観察館を建設された。この建物は、湖畔を一望できるカメラも設置されて暖かい室の中から、クッチャロ湖の全景を観察することができる素晴らしい施設で、町を訪れる観光客も大きく増加し、入館者には大変好評を得ている。

近年、この湖には、秋と春に2万羽以上のコハクチョウが中継地として集まるよう

になった。各文献を調べてみても、一目 2 万羽以上と言う湖はクッチャロ湖以外に無い。正に日本一、世界一？の湖だといっても過言ではないだろう。町民の一人として誇りに思う。

ラムサール条約とは何と聞かれるが「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という。

クッチャロ湖の白鳥

クッチャロ湖に渡来するハクチョウは、99 %以上がコハクチョウで、近年は秋、春とも 2 万羽以上が飛来する。

オオハクチョウは最高羽数でも 10 羽代で、アメリカコハクチョウはオオハクチョウよりも少なくほんの少しと言ってもよい。しかし、わが国に渡来するオオハクチョウは 3 万羽以上、コハクチョウも 3 万羽以上で合わせて 6 万羽以上が日本各地で越冬している。その 3 万羽以上のコハクチョウの 70 %以上が毎年クッチャロ湖に飛来するようになった。オオハクチョウは、何故この湖に渡来しないかと言うと繁殖地との関係があるようだ。コハクチョウは、北極海沿岸北緯 68 度より北部、オオハクチョウはそれより南のタイガ地帯で繁殖している。身体の大きなオオハクチョウは極北地帯でも少し有利な地域を繁殖地にしているようだ。北海道の各渡来地を見ても、道東地方はオオハクチョウで、道北地方はコハクチョウと棲み分けをしている。

クッチャロ湖には毎年 10 月初旬になれば一年度計のように決まって飛来する。それを白鳥初認といっている。秋の最高飛来数は 11 月初旬であるが、その年によって若干ピーク時が異なることもある。

この湖は、冬期全面結氷するため 12 月下旬より、春 3 月までは白鳥の越冬は無かったが、1987 年頃から数は少ないものの越冬するようになった。その起因は種々あるが、河口の改良によって汽水湖でありながら塩分濃度が高くなった。また、河口の拡張によって海水の流入が著しくなったため、寒中でも湖は凍結しなくなった。

最近の白鳥の様子を見ていると湖が凍結すれば頓別川の凍らない地域で越冬している。流氷が接岸時期には流氷の上をねぐらにしている群も観る。

今までは、コハクチョウは北海道で越冬しないとされていたが、新しい越冬地の歴史をかれらなりに開発しているかも知れない。

日本最北端の湖より

1975 年クッチャロ湖に於いて、001 Y の首環をコハクチョウに付け放鳥した（山階鳥類研究所の吉井室長の指導で行った）。この鳥が日本初コハクチョウ第 1 号であった。放鳥後、何年生きるか邪魔物を付けて可哀相だとか、除け者にされる、結婚できないなど色々なお叱りも頂いた。そのため、私は罪の意識に悩まされたこともあった。放鳥後、最初の越冬地は山形県最上川（酒田市）で元気であると判った。2 年目の冬は、一時、島根県中海で観察したと故門脇益市氏より報せがあった。随分、南まで行くことも判った。

この「1 Y」、4年目から秋期、幼鳥、初子3羽連れて来た。標識を付けた時は灰色した幼鳥で3.5 kgほどの弱々しい鳥であった。あの子が親になった。しかも3羽の幼鳥を連れて、甲斐甲斐しく初子を見守る姿に今までの心の葛藤も忘れ興奮さえした。この「1 Y」は11年間、私の前に毎年来て4度の子育てをした。11年間観察した鳥であったが、その後、不明である。クッチャロ湖で観る限り、白鳥の結婚適齢期は4年以上のようで、このことは若鳥の標識調査によって判明したものである。

日頃、白鳥を観察してみると飛行スピードは大変速いことが解かる。春、北帰行する一群の白鳥を町村堺より、猿払公園沖まで、飛去するのを観測した。南西の風、風速2~3 mでやや向い風。私の車は、時速70 kmを出すと白鳥を追い越してしまう。時速60 kmに落とすと丁度、合うぐらいであった。上空の速度や高度にもよるだろうが、割合スピードは遅いと思っていた。

1977年8月、ロシアのチャウン湾でも標識放鳥された。赤首環022 Cを付け放鳥してから3年目の3月16日、福島県阿武隈川で長年に亘り保護活動なされた故上竹二郎氏より、「今朝6時過ぎに20羽ほどの群と「022 C」が飛び立った。これで今年の白鳥は0羽となった」との電話であった。福島県からクッチャロ湖まで直線距離で図面上でも850 kmある。何日で飛来するのかなあと楽しみでもあった。その頃、クッチャロ湖には、2,000羽ほどの北上組が氷上に群れていた。日課のとおり夕方4時、給餌に湖岸へ行き氷上を見ると赤首環022 Cを確認する。

この氷上の休む様子をみているとこの湖には夕方3時頃に到着したと思われる。朝6時出発、午後3時到着となると滞空時間9時間で飛来した。時速94 km以上で飛行したこととなる。

日本では標識鳥により白鳥の飛行の新しい記録であった。今までに湖の上空を弾丸のごとく飛去するガンや白鳥を観察したことはあるが、上昇気流に乗って長距離飛行すると目的地まで、楽に飛行することを鳥たちは心得ている。

1999年クッチャロ湖より、日本野鳥の会が中心になり、NTT、山階鳥類研究所、東海大学、日本白鳥の会、浜頓別町の協力により人工衛星で白鳥の渡りの追跡を行った。放鳥は4月10日。4羽のコハクチョウ全て成鳥(雄3羽、雌1羽)に発信器を装着して放鳥した。個体はそれぞれ管理番号-ニックネームを付けて観察した。毎日元気に4羽とも給餌場に現れるため、今日もまだいるなど心中複雑な思いで観察していた(発信器が負担なのか?)。この頃、オオハクチョウも7羽ほどコハクチョウの群に混じっていた。そのオオハクチョウの中に「01289」(通称 八九)が仲間の様にして入っていた。4月21日朝まで連続観ていたが、21日夕方は不明、人は見落としたかと思っていた。4月22日再確認したが、仲間であったオオハクチョウは全て飛去っていた。その後、この「八九」は4月29日まで引き続き観察する。この21日夕方不明、22日未明に確認された1夜の間は国後島へ一寸一飛。オオハクチョウを見送ったのかも?それにしてもちょっと350 km一飛、往復したことになる。国後島はオオハクチョウの世界でびっくりして引き返したと思うが、人工衛星と発信器の確かさには驚きであった。

「のり子」雌、「青首」「針男」雄、「八九」も4月下旬から5月初旬には、次々とサハリン北部やアムール川付近へと移動した。このうち「のり子」は5月22日に北緯70度の北極海に注ぐコリマ川の河口付近に到着した。この「のり子」には「なみすけ」と言う夫がついている関係で、夫婦仲良く繁殖地へ着いたものと思う。後の雄3羽、北上途中結婚相手（雌）を探しながらの旅のようで、北緯60度のマガタン付近を北上中、5月中～下旬に発信が途絶えた。発信器の電池はリチウム製で2カ月以上の寿命があると聞いていたが、北上するに従って寒く電池が切れ、音信不通になったと思う。

この年の秋期の飛来時は「のり子」夫婦は2羽の幼鳥連れ。他の「八九」「青首」「針男」の雄2羽も配偶者を連れ「八九」「針男」も子連れ。「青首」は配偶者も子も無し（老鳥なのか）。全て4羽とも不用になった発信器は落としていた。

「のり子」夫婦については、越冬地は長野県諏訪湖で長年越冬しているため、発信器をつける前の名前は「ボケマル（雌）」と「ナミスケ（雄）」という昔の名前があった。

人工衛星追跡調査には、野鳥の会研究センター所長 樋口広芳氏（現 東京大学教授）、山階鳥類研究所、日本白鳥の会、松井会長には多大なご高配を頂いた。

これからも、各調査をすることで人間の計り知れないことが生まれるだろう。日本の何処へ行っても野生動物と共生できる国でありたい。全てがトキの様にならぬためにも。
（編集者追記：官庁名や役職等、原文のまま掲載しました）

山内 昇 略歴

- 1931年 樺太 遠淵村生まれ
- 1947年 利尻島鴛泊に引揚
- 1956年 国有林に奉職
- 1963年 白鳥に魅せられ浜頓別町に居住・白鳥保護に従事
- 1973年 日本白鳥の会設立総会参加
- 1973年 日本白鳥の会設立総会参加
- 1975年 国内初のコハクチョウ標識調査
- 1989年 クッチャロ湖ラムサール条約指定に貢献
- 1989年 クッチャロ湖ラムサール条約指定に貢献
北海道文化財保護功労賞・町からラムサール条約
指定に貢献のため感謝状受賞
- 1990年 国内初の白鳥類人工衛星追跡調査
- 1991年 定年退官 1998年 日本白鳥の会事務局長
- 2001年 日本白鳥の会名誉会員
- 2002年 自然環境功労者環境大臣賞受賞
- 2009年 浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館名誉館長
- 2012年 5月11日ご逝去